

● シリーズ 私の見た日本 Vol.184

## 日本で経験した建築

Vincent Sebastian (ヴィンセント セバスチャン)

インドネシア出身。  
2017年滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科  
に入学。学部生として構造材料の研究を続けている。

来日してから5年が経った。最初の2年間は京都と大阪で日本語学校に通い、その後滋賀県立大学で建築を学び始めて3年目になる。京都から大阪、そして滋賀で留学生として経験したことや考えたことについて話をしようと思う。

## 日本の住まい環境

日本に初めて来たのは2015年の春だった。初めて住んだ部屋は7階にある、20㎡程度の寮の2人部屋だった。一番印象的だったのは天井が低かったことだ。インドネシアの部屋の天井高は大体3m以上あるので、それに比べて1m以上も低い天井に驚いた。気温の高いインドネシアでは室温を下げるために天井を高くするのだが、四季のある日本ではそこまで高くできないことをその後知った。面白いことに、1年後帰国して自分の部屋に戻った際、インドネシアの3mの天井高よりも日本の2mの天井高の方がよく眠れることに気づいた。

インドネシア人はよく、自分の国は地震の多い国だと言うのだが、来日してそれが間違った認識だと痛感した。そもそも国の面積が違うし、海の面積も違う。日本の約5倍も広いインドネシアで地震が発生しても自分がある場所に当たる確率が低いのだ。実際、日本に来るまでは地震を経験したことがなく、

7階で暮らしていた当時は小さな地震でもすごく怖かったことを覚えている。

季節の話は絶対外せない。赤道直下に位置する母国インドネシアには乾季と雨季しかない。雨季でも昼は暑いので、エアコンは常につけたままにして、部屋から出ることを嫌がっていた。日本に来て初めて四季を経験して、慣れない冬の寒さは苦手のままだが、少しずつ変わっていく気温や空の色など、季節の移り変わりを観察することが好きになり、多く散歩するようになった。そのためか、私は時間と変化に勝つために建てられた西洋建築よりも、変化を拒まず、むしろ受け入れる日本の建築を素晴らしく感じる。

伊勢神宮はこのような概念を完璧に反映している建築だと考える。20年に一度再建され、「もの」よりも「こと」を重要視して、無常という概念のなかに流れていくのだ。

## 日本の集合住宅での生活を振り返って

日本語学校を卒業し、滋賀に引っ越した後、大阪での生活を振り返ってみると、隣の住民となぜか接触しようとしないうし、お互いの名前や顔を知らずともしなかった。距離の問題なのだろうか。空間の距離が近すぎるせいなのだろうか。私は疑問に思い始めた。

日本のアパートは、「こと」を重要視してきた日本建築と真逆な方向に進んでいるのだ。

結局のところ静かに寝られる場所さえあればいいというものになったのだ。インドネシアでは隣の住民のことを知らないなどということはある話なので、日本では住民たちのコミュニティとしてのつながりが薄いことが一般的なのかと思っていたのだが、そうでもないようだ。

滋賀での引っ越し先は住宅街にある2階建ての一軒家で、1階に家主が住んでいて、私は2階に入居した。近くには小学校があり、朝には子どもたちの歌声が聞こえ、大学に向かおうとしたら家主の孫たちが挨拶をしてくれた。孫たちと遊んだ後、家主から育てたトマトを分けてもらったとき、インドネシアのカンプンの生活を思い出した。

インドネシアのジャワ島では、「カンプン(kampung)」と呼ばれる場所が多くある。場所によっても違うが、多くのカンプンはスラムと似たようなものとしてみなされがちだ。しかし、私はカンプンというものはある種の良い建築として考えている。カンプンに住む人たちは食材の分け合いから、台風で壊れた家の共同補修まで、お互いに助け合う関係のなかで生活している。この相互扶助の慣習はよく、「共に持ち上げる」という意味で「ゴトン・ロヨン(gotong royong)」と言われる。これはコミュニティとしてのあり方を重視する集落だと思う。

都市化が進み、プライバシーやセキュリティなどが今まで以上に重要視されるようになり、便利かつ他人と接触せずとも困らない生活ができるようになった。しかし、隣人の名前や顔さえ知らないことはおかしいのではないだろうか。

そのようなことを考えるなかで、ある建築に出会った。東京都の大田区にあるリノベーションされた賃貸昭和長屋、大森ロッジだ。この集合住宅のスケール感は人を落ち着かせ、住民たちのための居場所づくりが徹底されていて、どこにいても安心感がある。

複数の長屋が並ぶその間には路地が通って、敷地内を回れる。それぞれの家には縁側に庭が設けられていて、それらは路地とつながり、庭を楽しみながら隣の住民とも挨拶を交わし合える。新しい入居者が来ると飲み会を開くなど、さまざまな行事が行われる。こういった空間であるからこそ、住民たちの間につながりが生まれたのではないと思う。

不思議なことに、国が異なっても、この建築にあるスケール感、距離感、空気感はインドネシアの人のつながりから形成されるカンプンと似ているように感じる。機会があればぜひこの場所に住んでみたいものだ。

## 共に建てて共につながる

昨年、東インドネシアにあるスンバ島で民

家を調査する機会が訪れた。インドネシアの首都ジャカルタで生まれたとはいえ、もともと建築とは無縁だったのでインドネシアの建築について詳しく説明できないし、インドネシアの伝統建築を建築的な視点から見るのはこれが初めてだった。

スンバ島に到着し、日本の四季とは違った、暑く、湿った空気が肌に触れ懐かしく感じた。ジャカルタから1,000km離れていてもやはりインドネシアだなと思った。翌日、ヒアリング調査のためにとある村に向かったところ、最初に目についたのは複数の家に囲まれた大きな石だった。家は木造の高床式で、高く突き出した茅葺屋根は特徴的だったが、構造的にない方がいいのではないかと、そもそも、大きな石はスペースの無駄なのではないかと、そういった疑問を抱いた。

調査を進めていくと、大きな屋根のなかにはマラプが住んでいることがわかった。マラプとは家を守り、繁栄をもたらす祖霊であり、神である。そして正面にある大きな石はマラプへの祭壇であり、村で儀式があるときはこの祭壇で行われる。調査当初に抱いた疑問が失礼にあたるのではないかと心配しながら、彼らの生活、習慣や文化についてのヒアリング調査を進めていった。生活だけでなく、建物のディテールや空間構成もマラプというルールによって決定されている。私たち

には馴染みのないものであるが、彼らにとっては意味のある、物事を左右する概念なのだ。

誰かが新しい家を建てる際には集落の人々が手伝い、その家ができれば皆で祝う。私たちの都市化した環境とは無縁なことだが、これこそがコミュニティを強く紡ぐ過程において特に大事なことなのではないだろうか。

そこで私はふと思った。こういった過程をコンセプトとして都市の集合住宅に導入するとどうなるのだろうか。住民たちが自由自在に発展可能な空間があり、創造という過程のなかでできた絆はどんなものなのだろうか。

例として挙げられるのは、アレハンドロ・アラヴェナの作品、Villa Verde Projectだ。住民たちが自らの手で、自分の居場所を形づくっていく住宅である。どのような方法で住民同士に関係性を持たせるのが課題になるのだが、大森ロッジのように距離感、配置、密度、スケールを調整することで実現できるのではないだろうか。

都市化が進む現代だからこそ、より人情的で、より人に近寄り生活のあり方が必要なのではないだろうか。

参考文献  
つなぐ〜るズ「くさる家に住む。」六耀社 2013年  
<https://www.omori-lodge.net/>



大森ロッジの全体図



スンバ島 マラプの集落



Villa Verde Project 完成前



Villa Verde Project 完成後